

春風と共に

よりも、双輪軽く春風と共に漂々と旅したい気持ちの方が遙かに強くなつてくるのである。この気持ちが頭をもたげるときは、毎年きまつたように三月のスキー行の帰りである。車窓から見る潤いを帯びた黒土の野道、その道の左右に拡がるさみどりの草

東京から名古屋への五年間の双輪の跡……

旅・七つの回想

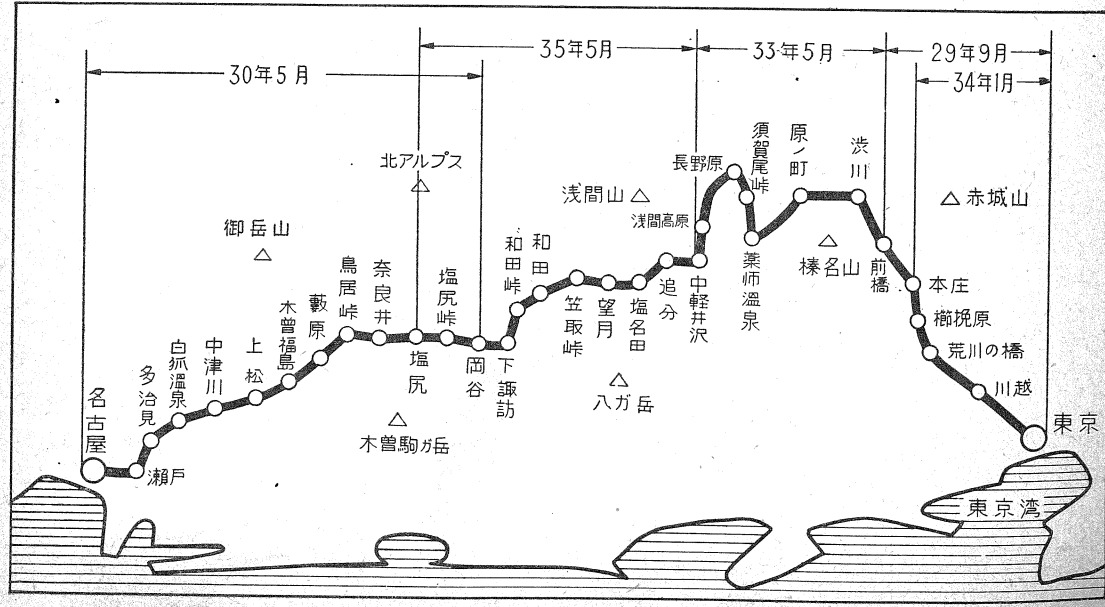
山本 秀男

私の双輪の跡は、五年の歳月を要して東京と名古屋の間を結んだ。すなわち東京―川越―本庄―前橋―渋川―薬師温泉―長野原―浅間高原―中軽井沢―追分―塩名田―望月―和田峠―下諏訪―塩尻―鳥居峠―木曾福島―中津川―白狐温泉―多治見―瀬戸―名古屋がそれである。この道は結ぶべく意図して結ばれたものではない、いわば思いつきの集積である。従つて走つた順序も相前後していれば、しばしば枝葉のように双輪の跡はそれている。だが、ともかくも東京―名古屋が一本に結ばれたわけである。感慨も一しおというところである。結ばれてみれば一本道ではあるが、想出は回想とともにあつて必ずしも一樣ではない。五年の歳月は感受性をも変化させたりし、自転車をも変化させている。あるときは風物に接して心悲しみ、あるときは少年のように楽しみ、あるときは失敗さえも演じている。その数えきれないほどの想出をたどるのも、一つにかかつて東京から名古屋まで結ばれたことが感無量であるからにはほかならない。

1. 荒川の橋と櫛挽野

荒川が秩父盆地から抜け出して、関東平野に入ろうという所に寄居という町がある。東京から川越街道を北西に走つて七〇軒ほどの距離だ。寄居の町から東へ四軒ほどであろうか、荒川に架けられた目立たない橋がある。橋には欄干がないので橋の名を知ろうにも手がかりがなかった。そんなことが私をひきつけたのかも知れない。走ることをやめて、人の通るのを待った。一人の気安さで誰にも気がねはいらなかった。

今年の一月のことである。私がこの橋の上立つたのは、もう三時を過ぎていた。一月のことだから、三時といえませんがに冷えも目立つ夕方であつた。その日は武蔵野の雪景色をみようと思ひ立つて、軽装備のまま川越街道をたどり、坂戸町から武蔵嵐山、男衾を経てこの橋に出たわけで、初めから日が暮れたら列車を利用して帰るつもりでいた。すでに本庄から帰るつもりになつていたので、あわてる必要は少しもなかった。年老いた夫婦がゆつくりと橋を渡つてきた。私は年寄を呼びとめて橋の名をたずねた。雪が降ると武蔵野の冬は見違えるほど明るくなる。一たび止めば、あわただしく溶けていくからである。



集合 二〇日午後五時、正丸峠ガーデンハウス前  
 行事 会員交歓、キャンプファイアー、秩父セメント見学  
 コース 正丸峠―秩父―長瀬―寄居―松山―川越  
 申込 各クラブ又は協会事務局（浦和市領家一六三 浦和 四六四一）

が、その明るさは底抜けといつていいほどだ。楡の幹のまわりから雪がとけるのも面白く、麦が緑をのぞかせたかと思うと、みるみるうちに畝が現われて大地に縞模様を作る。それに空が澄んで関東平野を限る山々が一べんに白くまばゆい姿を現わすのも景観だ。そんな風景を堪能したあげく、たので、荒川の浅い青い流れは、濁きをいやす水に似て少しも冷たさを思わせなかつた。私は北側の土堤の斜面に北風をさけて、一日の最後の日だまりの中に腰を下した。そして橋を更めて眺めてみた。

橋は流れの上だけがコンクリートで、乾いた川原の上は木作りである。欄干がないので橋の上はサバサバしている。けれども橋桁が大袈裟だ。私はやつと思ひ出した。この道に入る時、「冠水橋、自動車通行止」と記した交通標識があつたようだ。この橋は冠水橋なのだ。

荒川は荒れ川と呼ばれた。そのように大洪水を起して荒れたのだ。その洪水のとき上から来る流木をそらすのが、この冠水橋の役目である。人が渡るのは附録のようなものだ。私は本で読んだ記憶がよみがえつたことに楽しくなつた。

その日は荒川は静かであつた。流れから頭を出している石の上に挽セキレイが一羽、長い尾で石を叩いていた。端麗な姿の鳥をみると一人旅の味がしみじみと味わえるのであつた。

冠水橋から最短距離をとつて本庄へ抜けるつもりであつた。巾一米ほどの小道でみつけた古い石の導標は「当字を経て本庄方面」と刻まれていた。導標は二十二夜待の石塔と並んで枯草の中に立つていた。この古い導標に従つて踏みこんだのが榎挽原である。実際、踏みこんだという言葉がびつたりしていた。寄居をまわれぼよかつたと後悔したが、戻るとも何か惜しまれた。およそ四軒平

方はあると思われる平坦な開拓地である。まだ代替りをしたことがないだろうと思われる家が、大地にへばりついていて、そんな家も遠くに見えるだけで、道は無愛想な表情をして真直に伸びていて、大きな石が粗つぽく敷きつめられていた。そして石と石との間からは雑草がのびていて、そのまま枯れていた。自転車は歯が立たなくなつた。仕方なしに引いて歩いた。ところどころ十字に交差する道はあつても、どれも同じような道だつた。左手には秩父の山なみが逆光にたつた。前方よりやや右手に赤城がのじかる雲をささえて横たわつていて。およそ北西に向つて歩いていると考えられた。けれども、方角はわかつても、二、三〇分の間はあがきようがないことは知れていた。ただ黙々と車を引いて歩くだけだつた。

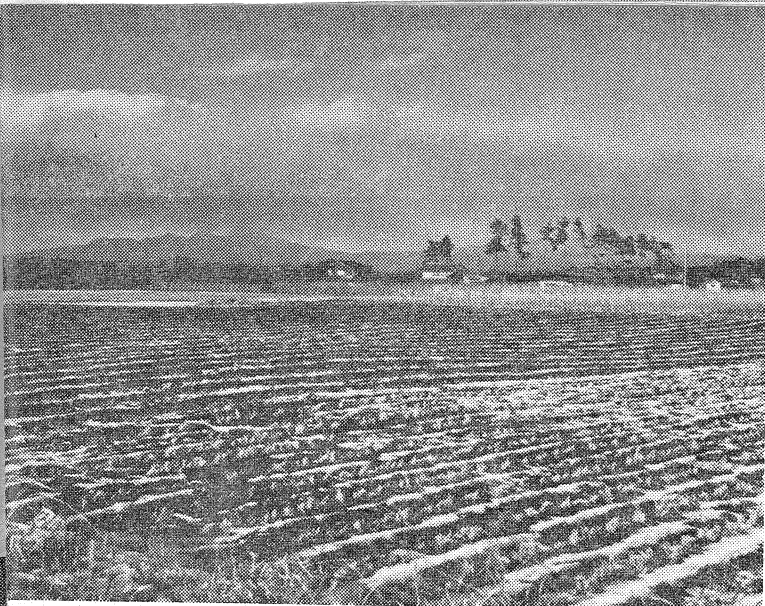
歩きながら私は回想していた。私の生きてきた一時機に、こんなやり切れなさの何年があつたことを。戦争の結末を皮膚で感じていた頃だ。休日以外に新宿を歩くものなら憲兵が眼を光らしていた時代があつた。あがいても仕方がないと思つて歩いていた。そんな歩みを、戦後どれほど悔んだか知れなかつたが、その揚句に兵役であつた。ちようど、こんな日の暮に、駒沢練兵場で母と面会したことがあつた。その時は肌に靖国神社の門鑑が冷たくへばりついていて。死んでも誰であるかが、すぐわかるようにするための、真鍮の小判の形をした薄い板だ。

## 2・山の湯：薬師温泉

薬師温泉の想出は、不愛想な子守娘の想出でもあるが、不思議と腹がたたないから面白い。

去年の五月の連休である。第一目の宿を薬師温泉にきめた旅だつた。高崎で車を受取り、前橋へきたらもう昼近かつたという、のんびりした走り方だつたが、今井氏と平岩嬢という気心の知れた三人連れは、追風に追われて、どうやらランプを使わずに自動車道のドン詰りまで到着した。薬師温泉は浅間隠山の麓にあるが、道は一方にだけ開けている辺鄙なところだ。私たちは高崎から前橋、渋川に廻り、吾嬬川の南岸、つまり日影道をたどつて、原ノ町から温川ぞいに入つてきたのである。近道をするなら高崎から直接榛名の裏を廻つて温川ぞいに出ることもできるが、わざわざ遠廻りしたのも、高崎の群馬バスの案内所に頼んで薬師温泉の予約をしておいたからである。自動車道のドン詰りを左に折れて温川の川音を真近に聞くころは、すっかり日が暮れていた。鳩の湯の佻しい灯影が夜を招きよせているように見えた。鳩の湯の前を通りすぎると、まもなく薬師の温泉宿だ。どちらか一軒家で、温川の流れたかたえにあつた。

玄関に立つていたのは子守娘であつた。



案内を乞うたが返事をしない。子守娘は奥から誰か出てくるものと思ひこんでいるらしい。ただ、珍しい形をした自転車とニツ

## 薬師温泉

た。私は湯に浸りながら雰囲気を感じていた。今井

た。薬師温泉に山の一夜を送つた私たちは、吾嬬溪谷の羽根尾から浅間高原へ登つた。

案内を乞うたが返事をしない。子守娘は奥から誰か出てくるものと思いこんでいるらしい。ただ、珍しい形をした自転車とニツカースにハンチング姿の異な風体の私たちを見比べては眼を丸くしているだけであつた。

「誰もいないのかい？」

と娘に聞いた。

「いる」

といつて奥の方へ首を廻したが、呼ぼうとするのではない。大変なところへきたと思わざるを得なくなつた。

「今晚は！」

と大声を出した。女が出てきた。

「満員ですが——」

これには流石に驚いた。高崎の群馬バス案内所で予約をしておいたのだが聞かなくかつたかと尋ねると「聞いたような気もする」といつて、はなはだ頼りない。部屋があるから来たのだと駄目を押すより仕方なかつた。一軒宿ではそれより手がない。

「じゃ、とにかく上つて下さい。成田から来るというお客さんがまだきてないんで空いている部屋がありますから」

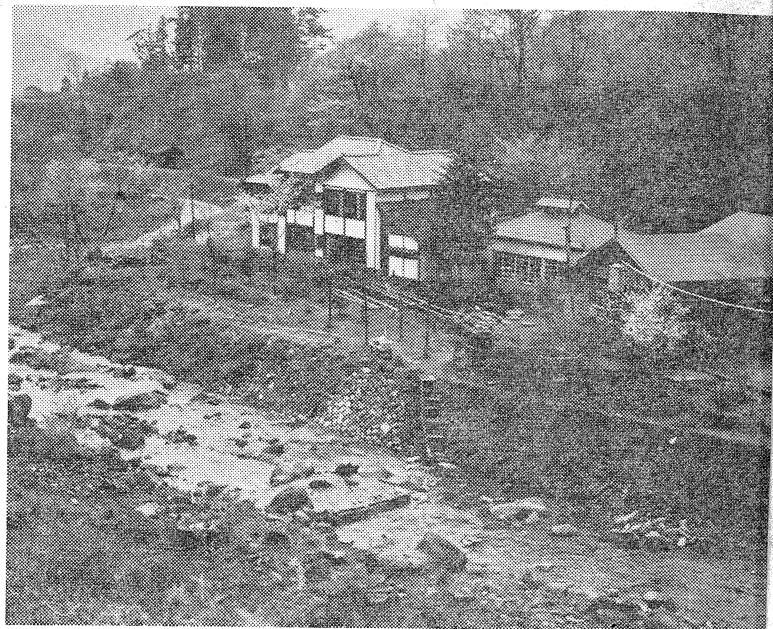
と答えた。

「成田のお客が来たかどうか？」

「上の部落の誰かの家に交渉して泊まれるようにしてあげます。もうすぐ最後のバスが来るから、それでこなければ、そのままです」

「大変なことになつたが、それもやむを得ない。せめて食事を急いでくれと頼んで、

ばよかつたと後悔したが、戻るのが、何か惜しまれた。およそ四軒平した薄い板だ。



あてがわれた部屋に落付いた。

山小屋を少し立派にしたような作りだが部屋は十二畳くらいだつたらう。襖が板張りなので妙に暗い。小さな食卓が、こと更に小さく見える部屋だ。

時計を見たら終バスはもう二〇分前に着いている。間もなく、成田の客が来なかつたことがわかつてホットした。

湯は、ぬるくてにごつているが、木造りの浴槽が、川の音と調和して、人の心をしずめてくれる。湯治の客だらう、聞きおぼえのある上州訛でボソボソと話合つてい

ちらも一軒家で、温川の流れたかたえにあつた。

玄関に立つていたのは子守娘であつた。

### 薬師温泉

た。私は湯に浸りながら雰囲気を堪能していた。今井氏も同じような顔をしていた。部屋がきまつたら、一べんに落付いてしまつたようだ。大そう温まる湯であつた。

献立はイワナのフライとワラビと、そのほかにも何かがあつたようだ。折角のイワナもフライなので、いささか失望したが、それでもマグロの刺身が出ないのでホットした。

二本ばかりのビールが、たちまちに眠気をさそつた。

あくる朝は須賀尾峠を越えて長野原に出たが人しか通れないこの山深い道を越えるには、スターメーアーチャーのFWをつけたライトツーリスト型の自転車が大そう役にたつた。オールランダーのバーは急勾配の下りを容易にしてくれたからである。

### 3・浅間高原

満目蕭条。そんな古風な表現がびつたりする。五月初旬の浅間はそんな風景であつた。

薬師温泉に山の一夜を送つた私たちは、吾嬭溪谷の羽根尾から浅間高原へ登つた。軽井沢へ出て汽車で帰るつもりであるからこの日もゆつくりした旅の気分を味わえた。だが、それにしても、なんと浅間高原は荒涼としていたことだらう。

北方に白根山、その左が吾妻山、そして西方眼の前は浅間山が煙をあげている。東をみれば頂上の尖つた浅間隠山があり、稜線をつなげて鼻曲山の特異な山容に続く。この広い空をささぎるのは、そうした山だけで、南の方は、高原がそのまま地平線を画いている。山は黒ずみ、草はまだ枯れたままである。落葉松の芽吹さえ、須賀尾峠にくらべてはるかに若い。道は南に登るに従つて悪くなる。火山灰の薄ぐろい道だ。轍の跡は浅い。わずかな勾配ではあるが明らかに登りである。そのうえに火山灰の道は足を奪おうとする。難渋というほどではないにしても段々と足が重くなる。

そんな風景の中で私は舞台装置家のような気分を遊んだ。それは今井氏がはるか後に走っているからである。後をふりかえつては、装置を考えていた。舞台装置といつてもこの大きな自然を動かすことも出来ないければ刻むこともできない。ただ主演俳優の性格を最もよく活かす、効果的な背景を発見しようとしていたのだ。

私の思うところでは、今井編集長ほど、荒涼たる風景の似合うサイクリストはいない。冷酷なまでに執拗な眼鏡の奥の眼と、